

なぜ学ぶのか、何を学ぶのか、どう活かすのか

子育て続け放射線の専門看護師目指す

長崎大学保健看護コース 山田裕美子 さん

看護師になってから1年ほど経ったころ、救急放射線部に配属となりました。ここは、救急看護、放射線看護の両方を掛け持ちで行いますが、やりがいを感じる職場でした。5年近く勤務しました。



務を続けるかたわら、夕方から講義を受け、さらにレポートをまとめる時間を作るとい

その間に結婚、出産し、2011年3月11日は育児休業中でした。自分と子どもを守るのに精一杯でした。その後、同僚の話を聞くと「原発で被ばくした人の受け入れ態勢を整えた」「ヘリで現場に飛び、被ばく者の救急医療をした」といった話を聞き、放射線看護が、こういう緊急の事態で役立つことを実感しました。そして、自分がやってきた放射線看護をもっと深め、得意分野と言える専門性を持ちたいと思いました。

その後、同僚が保健学専攻の「放射線看護専門看護師コース」で修士号を取得したこと、その同僚から「共同大学院ができるから、入学してみたら」と勧められたことから、無謀かとも思いましたが、これも何かの縁だと思いつきました。試験まであと2カ月というときでした。

大学院に入学後は、英語をはじめいろいろな基礎学力がない中、看護師としての勤

う生活になり、当初はベースをつかむのに必死でした。同僚の協力もあり、また、私の実家も夫の実家も大学に近いことから、何とか仕事、学業、子育てを並立させています。育児短時間勤務を朝の30分に移して、子どもといる時間を少しでも長くする工夫もしています。

放射線についてはまだ1年ほどの勉強ですが、看護の現場では、患者の不安や質問に対して、自分の言葉で自信をもって対応できるようにになりました。そして現場での仕事が改善されると、新たな疑問も出てきます。これを大学院での学びで解決するという循環になっています。今後は災害支援の経験も積み、有事には専門看護師として緊急被ばく医療に携われるスキルを身に付けたいと思います。

学ぶほどに知る喜びが増していく

長崎大学保健看護コース 山口拓允 さん



長崎大学保健学科に入学する直前の2011年3月、自動車学校のテレビで福島原発事故の映像を見つけていました。前日は津波の映像も見ていました。自分に何かできるのか、でも今は何とできない。小学校の社会科見学で訪れた玄海原発で聞いた「原子力の平和利用」は嘘だったのか……。

何ともいえない不安や焦燥を抱いたまま、保健学科に進んだ後は、びっしりのカリキュラムの中で目の前の勉強に夢中になりました。2年生になったとき、放射線看護専門看護師コースを専攻されている新川哲子先生に出会いましたが、「こういう専門看護師の道もあるのか」と思った程度でした。

私は、高校時代に手に職をつけて人の役に立ちたいと考え、看護師の道を選び、大学院への進学も何となく考えていました。大学3年生の後期で長期実習を受けている最中に、共同大学院設置の話聞き、入学前から考えていたこと、東日本大震災以来、何かしたいと思っていたこと、そして放射線看護専門看護師というコースがあることなど、おぼろげだったことがすべてつ

私は、長崎大学病院の診療放射線技師として12年勤務してきました。放射線を管理する立場として、医療で使われる放射線とは異なる放射線への対応を学ぶため、原子力安全推進協会が開催する講習会や、玄海原発での事故を想定した緊急被ばく医療訓練に参加してきました。

東日本大震災による福島原発事故では、先遣隊の一員として現地に入りました。福島医大には4日ほど滞在しましたが、事故の規模は私の想像以上のものでした。福島医大、長崎大をはじめとする各地の医療支援チーム、自衛隊、消防、警察などさまざまな職種が協働して、対応拠点を作り上げていくところを目の当たりにし、こういう場で貢献したいと思いました。

福島での貴重な体験を生かしたい、その体験をいろいろな人に伝えたい、そして被災現場でもっと貢献するには、放射線のことを改めて勉強し、深く知りたいと思うようになり、長崎大学は2015年に高度被ばく医療支援センターに指定されました。私は「放射線の管理は診療放射線技師が担うべき」と考えていたので、身が引



長崎大学医科学コース 岩竹聡 さん

放射線の管理は放射線技師が担う

カザフスタン共和国から留学している Aidana です。2015年にセメイ医科大学を卒業し、インターンを務めていましたが、長崎大学が福島県立医科大学と共同大学院を設置することになると知り、留学、進学を決意しました。

カザフスタンでは、1949〜89年まで、セミパラチンスク核実験場で核実験が456回行われました。そのうち116回は地上での核実験です。その結果、核に汚染された地域は1万8000平方キロメートルに及び、周辺住民は直接、間接の放射能被ばくを数十年にわた

り受けてきました。がんの発症や子ども

の先天異常は他地域に比べ、多くなっています。核実験が終わっても、放射線被ばくはカザフスタンの深刻で重要な問題です。

私は、被ばく者の医療とケアを、日本でもっと総合的、専門的に学びたいと考えています。日本では、長崎、広島で原爆被ばくの研究が長期にわたって行われてきました。福島の原発事故では緊急被ばく医療が行われ、現在は3つの大学が共同で被災者のケアを継続しています。

長崎とカザフスタンは、長きにわたって親密な関係にあります。山下俊一先生は、1995年からセミパラチンスク核実験場周辺での調査活動を行ってきました。また、セメイ医科大学と長崎大学は1998年に学術交流協定を締結しまし

き縮まる思いでした。そして、どうすれば自己研さんできるのか、あれこれ悩んでいるときに、共同大学院の設置構想が耳に入り、迷わず入学しました。

入学後は、新しいことをたくさん学んでいます。地震、火災、台風など自然災害への対応、災害時に全国各地で組織され、駆け付けるDMATの活動など、放射線技師では知ることができなかったことばかりです。

長崎大の先生からは、原爆とチェルノブイリの調査研究によって得られた数多くの知見を学びました。福島医大の先生からは、原発事故により引き起こされた数々のエピソードとそこから得られたことを語ってもらっています。これからも自分の学びたかったことをお腹一杯になるまで詰め込んで卒業し、職場でも災害時でも貢献していくつもりです。

た。そして長崎大学は、長崎・ヒバクシャ医療国際協会（NASHIM）を通じて、被ばく者医療関連医師を研修生として受け入れています。私もその一環として留学しています。

共同大学院での研究の目的は、放射性災害による医学的影響、心理面への影響を、災害の発生前、発生中、発生後の長期にわたって、調査・観察することです。リスクコミュニケーションだけでなく、災害発生時のクライシスコミュニケーションも学ぼうと思っています。

共同大学院では、ジャック・ロシャール先生をはじめ、文化人類学のキム・フォーターン先生（米国レンセラー工科大学）、国際原子力機関（IAEA）のレイ・チェム先生ら、多様な分野の専門家による講義があり、私が目指す、放射線の影響に対する複合的かつ多彩な視点を持つ上で重要です。今後は、住民との結び付きを深めるためのコミュニケーションスキルも身に付けたいと思っています。



そうもないので、さらに博士課程に進み、災害・被ばく医療を学ぶつもりです。

長崎大学医科学コース Amrenova Aidana さん

複合的な視点から放射線の影響をみる